



【ものづくり 人づくり 地域づくり】

みんなの力をあわせて 40年

10/30「協同・感謝のつどい」(2)

提携・協力団体からのメッセージ



常総生協はどんな精神を受け継ぎ、どんな仲間や団体と共に活動してきたか (1)

日本有機農業研究会副理事長 魚住道郎さんからの手紙
常総生協40周年「賀川豊彦、一楽照雄が生きていたらどのように見てくれたでしょうか」

賀川豊彦 (1888-1960)

日本・世界の「協同組合の父」と言われる。神戸の貧民街に住んで伝導と救済活動に献身。第一次大戦後の不況下で苦しむ人々の生活安定のために日本で初めての生活協同組合をつくり(現コープこうべ)、様々な社会改革運動の先駆者として活躍。関東大震災の時、翌日には神戸から東京に向かい炊き出し、救援活動をおこなった。



常総生協でもみんなで賀川を学んでいたことから、東日本大震災時すぐに東北被災地支援活動に入ることが自然に行われた。

賀川は国際的にも平和運動を展開し、戦前ではガンジー、シュバイツァーと並んで「20世紀の三大聖人」の一人として世界に親しまれた。

一楽照雄 (1906-1994)

農林中金、全国農協中央会を経て、協同組合経営研究所理事長。1971年日本有機農業研究会を創設し、消費者と生産者の協同・提携による食意識の改革と実践を呼びかける。

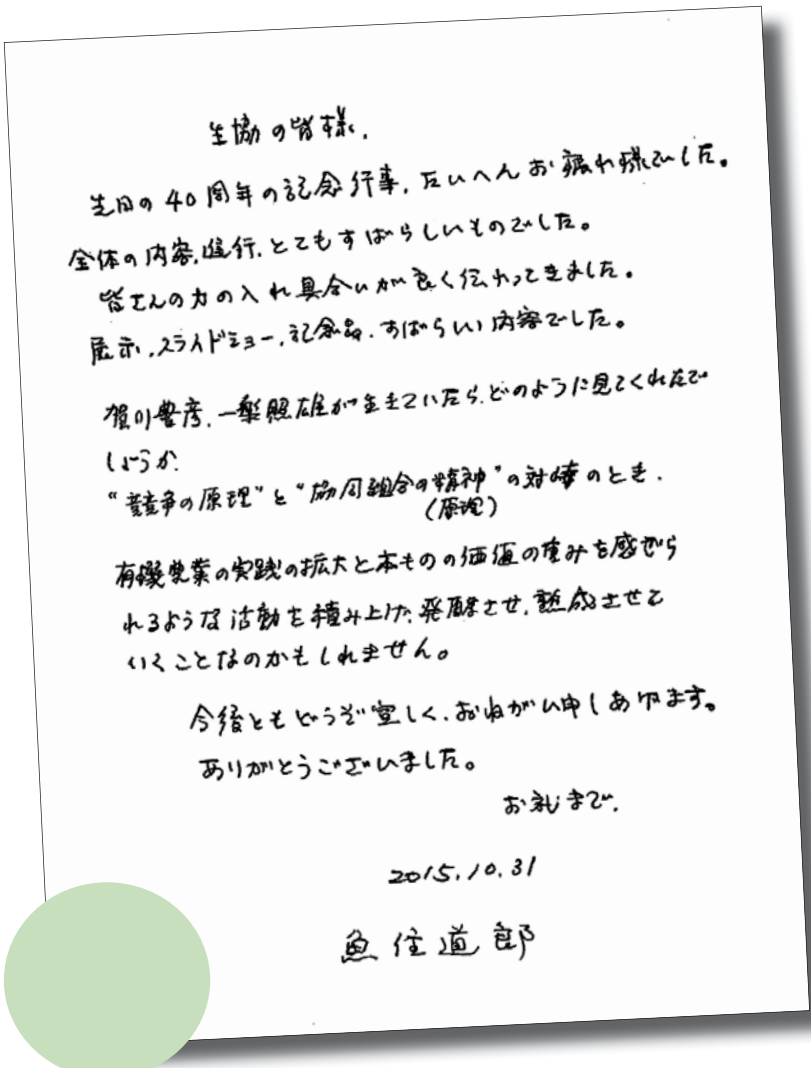


「有機」という言葉は、サツラク農協をつくった黒澤酉蔵(茨城出身・足尾鉞毒事件で田中正造に師事)の「天地有機」の伝えから。

常総生協でも一楽照雄氏が主筆の『協同組合とは何か』を新人研修のテキストとして夜の読み合わせ勉強会を開催してきた。

のちに日本有機農業研究会とも出会い、有機農業運動が消費者と生産者の協同運動であることを知り、常総生協として研究会に団体加盟して学んできた。現全国幹事の一員。

魚住さん(石岡市やさと)は東京農大時代から有機農業研究会設立に加わり、一楽照雄の愛弟子として、有機農業を生産者と消費者の「提携=協同」運動として実践してきた。常総生協組合員としても様々な問題提起を頂きながら、共に東北・福島支援活動や、常総生協と有機農研の「放射能共同検査室」を設置。



生協の皆様、
先日の40周年の記念行事、互いへんお疲れ様でした。
全体の内容、進行、とても素晴らしいものでした。
皆さんの力の入れ具合、いかに伝わってきました。
展示、スライドショー、記念品、おぼろしい内容でした。
賀川豊彦、一楽照雄が生きていたら、どのように見てくれたら
いいか。
“競争の原理”と“協同組合の精神”の対峙のとき。
(原理)
有機農業の実践の拡大と本物の価値の確立を感じら
れるような活動を積み上げた。感謝させ、醸成させて
いくことはのかましません。
今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。
ありがとうございました。
お礼まで。

2015.10.31

魚住道郎

提携・協力団体からのメッセージ



日本有機農業研究会 魚住道郎さん



常総生協 40 年、ご苦労なことがたくさんあったことと思いますが、まずはおめでとうございます。

わたくし自身も農業をはじめて 40 年になります。常総生協と同じ歴史だなあと改めて思いました。

さて、今年は「国際土壌年」ということで、国連が「土が病んでいる。みんなで考えようよ」と、そういう年でもあります。

「身土不二」という言葉があります。身体＝人間の健康と土が一体のものであるというものです。その地域でとれたものを食べていくことがその地域の人の健康が維持されていく。この考え、この哲学をもう少し広げて深めていきますと、土＝人なんです。土が病むと人間社会が病む。これが近代化の

70 年の歴史だったじゃないかなと思うわけです。

土が「単粒化」するという言葉が農家にはありますが、土が酸性化したり腐植が減ると土壌の流出が止まらなくなる。ちょっとした水でも大水でもさっと流れてしまったり、舞い上がってしまいます。

それを止めるには土壌の「団粒化」をはかる。堆肥を入れて、微生物を活発にし、土が簡単には流れていかない、水はけが良い、栄養価の高い土を作る。

「土」を「人」と考えると、「人間社会の団粒化」をはかることが、私が 40 年かけて到達した境地であります。

土が酸性化してくると人間社会は右傾化してきます。これを直さなければいけない。緩衝力のある土というのは堆肥がしっかり貯えられた土です。そういう社会にわれわれは近づいていかなければいけない。何があっても耐えていける社会。それは生産者と消費者が支え合う提携であったり、こういう協同組合の活動であること、その精神であることだと。

そういうことを私も 40 年かけてようやくたどり着けて、この場でお話しさせて頂いて、常総生協 40 周年への祝辞と代えさせて頂きます。

東海第二原発差止訴訟団 相沢一正さん

先ほどご紹介いただきました通り、「原発と人間は相容れない。できるだけ早く原発をやめるように」と 40 年来裁判を続けてきました。そして福島事故後、再度地域住民が結集して東海第二原発の運転差止訴訟を起こしました。常総生協のみなさんには、特に大石さんには東海第二原発の差止訴訟の代表としてがんばってもらっています。それを常総生協のみなさんが支えてくれている。とてもすぐれた代表だし、訴訟団としてもしっかりした組織を作ってくれています。たいへん感謝をしております。

先ほど前理事長さんより常総生協は個を守ってきたというお話がありましたが、それは今とても大事になっていると思います。現在の安倍政権のやっていることは国家とか、大きなものを守ることであっ



て、そのためには個の犠牲はやむを得ないということで、福島の例はまさにそうではないかと思うんです。

一人一人の人間を大事にする、この姿勢が大事だし、その根底にあるのが食と農、生活、地域だと思えます。常総生協はそのことをきちっとやって問題提起をしてきている。外から見ている素晴らしい組織だと感じております。40 年のお祝い、本当におめでとうございます。どうぞこれからもよろしく願いいたします。

40周年協同・感謝のつどいに来て下さった協力提携団体のみなさん

日本有機農業研究会（魚住道郎さん）、二本松有機農業研究会（大内信一さん）、東海第二原発差止訴訟団（相沢一正さん）、原発いらない福島の花たちの会（谷田部裕子さん）、子どもを放射能から守ろう関東ネット（木本さゆりさん）、関西よつば連絡会（津田道夫さん）、アサザ基金（諏訪茂子さん）、ワーカーズコープちば（杉本恵子さん）

原発いらない福島の花たちの会 谷田部裕子さん



40周年おめでとうございます。新参加者です。常総生協さんとお知り合いになったのは3.11がきっかけでした。それまでは知る由もなかったのですが、この席でみなさま方のこれまでの思いや、お姿に本当に感銘を受けました。

常総生協さんの「食はいのち」って言う、これはわたしたちが子どもの未来を守りたいという活動の根本と重なっているとつくづく思っております。生産をされる、いのちを作る地道な活動が、闘う活動に自然につながっていたんだなと意を強くして、これから

先もどうぞ仲間の端くれとしてごいっしょにしたいと思います。今日は本当におめでとうございました。今日はお招き頂きましてありがとうございました。

原発いらない福島の花たちの会

武藤類子さんら福島的女性を中心に、東電福島第一原発1号機が40年を迎える2011年3月26日廃炉に向けて「ハイロアクション」を計画していた矢先に震災・原発事故。「原発いらない花たちの会」を結成し、10月経産省前座り込みをはじめます。

常総生協の女性たちも放射能問題から脱原発運動に立ち上がる中で、福島県出身で武藤さんらと脱原発活動をされてきた那珂市在住の谷田部裕子さんらと知り合い、2012年5月に「つながろう、たちあがろう、いばらきの女たち」交流会 in 東海村を開催。9月には谷田部さんを通じて武藤さんをつくばにお呼びしてお話を聞く。これを機会に、福島の花たちが提起した「福島原発告訴団」にも参加。

2013年谷田部さんらと共に子どもたちの甲状腺検診のための「関東子ども健康調査支援基金」設立。

子どもを放射能から守ろう関東ネット 木本さゆりさん

今日は40周年おめでとうございます。わたくしは「放射能から子どもを守ろう関東ネット」という、原発事故以降、関東の汚染地域で母親たちが立ち上がった42団体につながってできました。その共同代表のひとりとしてやっております木本と申します。

私たちは2011年原発事故がなければたぶんこのような出会いは持てずにいると思いますが、そのことがきっかけとなって子どもの命を守る、くらしの中で食を守っていくということは母親にとっていちばん大事な事だった、そのことを守るために自分たちがやらなければならない、人任せにはならないという自覚が芽生えました。

その子どもたちの健康を守ってゆくために、今「関東子ども健康調査支援基金」を立ち上げ、常総生協さんが事務局を引き受けてくださっています。もうかれこれ2年がたちますが、子どもたちの甲状腺のエコー検査をしております。すでに4千人の子ど



もたちの検診をしました。こういったことが「協同の精神」と言いますか、その中で組合員だけでなく地域の子を分けへだてることなく常総生協が立ち上がってくれて子どもたちのいのちを守ってくれる活動をしてくれるということはどれほどか私たちの拠り所となっています。すべてカンパでまかなわれている活動で、みなさまにカンパの協力を頂いています。ありがとうございます。福島や北茨城市でも甲状腺がんの子どもの報告がされています。事前に見つけて子どもたちを守っていく活動です。今後ともみなさまにご理解ご協力を頂きたいと思います。今日はありがとうございました。よろしく願いいたします。

志しおなじくする仲間の生協からのメッセージ

生協ネットワーク21元会長

常慶良輔さん



みなさんこんにちは。常慶良輔といます。生協ネットワーク21の仲間と交流、懇親、そしていろいろなことを学び合おうと生協ネットワークの一員として私もいっしょにやってきました。今日は常総生協40周年ということで、早く駆けつけなければいけなかったのですが、わたくし現在、東京の専門学校の教師をしておりまして、午前中授業をやって生徒たちと商店街の調査活動をやってから来たもので遅れてしまい申し訳ございません。

先ほど常総生協のセンターを見させて頂きました。立派なセンターですね。すごいなあと思いました。各部屋を案内させてもらったところ、これはどこの生協にもないだろうなというのがひとつありました。図書室です。生協に図書室があっげっしり本が、いろいろな本がありました。ああこれはいいよなあ、理事長、副理事長の思いが詰まっているのではと感じました。

それから、明日お祭りだということで職員さんは準備をされていましたが、ここまで送ってくれるということで、2ヶ月前に生協に入った職員さんに送ってきてももらったんですが、その人がこの2ヶ月間の中で

常総生協 40周年式典に来てくださった
生協ネットワーク21の仲間の生協

あいコープみやぎ、あいコープ福島

生協よつば会、なのはな生協

自然派くらぶ生協

あいチョイス（あいち生協）

コープ自然派事業連合

いろいろな体験をしたと話してくれました。「自分は自動車関係の仕事長くやってきたが、これは被災して大変だった訳ですけれど川が氾濫して常総市の被災に対して、ボランティア、支援、炊き出しからサンマを焼いたりしてきた、こういうことは普通の企業では経験できなかった。これを経験して、生協が地域に役に立っていくということを自分で感じました」と、こういうふうに言ってくれて、ああ本当に大変だろうけれど、そういう企業にはない事を常総生協さんっていうのはやっているんだと、そのことを身をもって感じました。

私は以前に「赤字がなくなった時が危険だぞ」という失礼な話も大石さんにしたことがあったんですけど、でもみごとに40年を迎えられてセンターも作られ、そしてますます地域に必要な生協としてやり抜いていっている。これはやはりリーダーだけでなく、それを支える多くの組合員がいるということだと思います。本当に40周年おめでとうございます。これからも頑張ってください。

茨城県生協連合会専務理事

古山均さん

茨城県生協連合会の専務理事の古山でございます。私ども県内の生協が集まりましていろいろ活動をさせて頂いておりますが、直近では常総市の水害の被害への活動、その中でも常総生協さんにはボランティア活動をはじめ炊き出し、衣類の提供など本当に献身的にやって頂いております。感謝しております。こういう活動ができるというのが、今日もみなさんが感じておられる常総生協さ



んがこれまで40年にわたって培ってこられたものなんだとあらためて確信した次第です。これからも常総生協さんといっしょになって茨城県内の地域に貢献していければいいと思います。今日は40周年おめでとうございます。